

【紹 介】

「第三世界と世界政治」研究会・資料紹介(3)

翻訳 『Theotonio Dos Santos, “La crisis del milagro brasileño”』  
〔ブラジルの奇跡の危機〕

青 木 芳 夫  
蔵 重 毅

次に訳出するものはテオトニオ・ドス・サントス、『ブラジルの奇跡の危機』(『Theotonio Dos Santos, *Brasil: La evolución histórica y la crisis del milagro económico*, México, Editorial Nueva Imagen, 1978)の第二部第一章(一三二〜一五一頁)である。第二章「ブラジル——独裁の危機——」と対になって一九六四年クレーター以後のブラジル軍事体制を根本から批判する論文である。ドス・サントスは「従属理論家」の一人としてフランク(Andre Gunder Frank)やフミン(Samir Amin)とト

「第三世界と世界政治」研究会・資料紹介(3)

もに国際的名声をえており、彼の代表的論文である「従属の構造」(『The Structure of Dependence』)は本研究会資料紹介の第二回分「従属理論に関する八論文」のなかに要約紹介されている。現在はメキシコ国立自治大学経済研究科博士課程担当教授である。著書には『*Socialismo o fascismo: El nuevo carácter de la dependencia y el dilema de América Latina* (Buenos Aires, Ed. Periferia, 1973)、『*El concepto de clases sociales* (México, Ed. Nuevos Horizontes, 1976)』などがあり、最近彼の理論を集大成した大部の著『帝国主義

(五九三) 一三三三

と従属』(Imperialismo y dependencia, México, Ediciones Bra' 1978) が出版された。

故国ブラジルを追われてすでに一二年になるロス・サントスの激しい文体は意識的におさえて訳出したが、それにもかかわらず、ブラジル軍事体制にたいする一方的非難の書であるとの印象を受けるかもしれない。しかし、重要部分は客観的分析に終始しているし、なにもましてブラジルの「奇跡」が喧伝されてきた事実を考えると、彼の根本的批判を聞くことは大いに必要である。ロス・サントス自身日本での紹介を強く望んでいる。分析の理論的基礎は上記の資料紹介第二回分を参照されたい。第二章は政治的分析にあたる。次号で訳出しよう。

### 一 はじめに——テーマの重要性——

一九六四年のクーデター後ブラジルに定着した経済成長戦略は、多国籍企業と結びついた主要セクターによって「自由企業」の理念に立脚しすべての発展途上国が追随すべきひとつの経済発展モデルとしての役割をになわされるにいたっている。

ブラジルの経験は比較的進んだ工業化段階にある従属資本

主義的發展の典型的モデルだから、それ自身国境を越えた理論的重要性を実際にもっているし、またその周囲に巨大な宣伝装置が活動していることも明らかである。最近キッシンジャーが「新興大国」としてのブラジルの例外的立場を承認したため、ブラジルはラテンアメリカにおいて特別な待遇を与えられ、両国間には相互協議体制が確立した。これは、帝国主義とその戦略にとってきわめて重要な事態がブラジルで生じていることを示すものである。

南アメリカ大陸と南大西洋におけるブラジルの覇権的役割の承認は、ブラジルの軍部とテクノクラートが長らく抱きつづけ、しかも内外の巨大資本もまた共にしつづつあった夢に対応するものである。渴望のすえにつかんだ覇権の第一の代価は、米国の対外政策、とくに第三世界政策にたいする全面的な追従であろう。つまり第三世界のカルテルや集団圧力方式に反対し、南北会議のみならずラテンアメリカ経済システム(SELA)他の国際機構においても帝国主義の橋頭堡として奉仕することを約束している。このきわめて重要な役割と引きかえにブラジルはアラブ世界(ブラジルがその石油消費の八〇パーセント近くを輸入に頼っている現状からくる国連での反シオニズム投票の例)やアフリカ(アフリカ市場獲得

の希望と結びついたアンゴラ人民政府承認の例)において、さらにある程度ヨーロッパ(フランス、おそらくはイギリスとも協調して結んだ西ドイツとの核エネルギー協定の例)や日本(ガイゼル Ernesto Geisel の訪日によって結ばれた通商協定の例)においてもその「プラグマティズム」政策を展開するだけの一定限度の自立性をえているといえよう。\*

しかし「新興大国」の承認は、確固とした理由によって裏打ちされてもいる。第一に、国際資本に門戸を全開しはしたがいまや重大な経済危機にひんしているため、帝国主義がすでに多大のコストをかかえこんでしまった投資天国イメージが破壊されかねないという国にたいしては十分な支援を与える必要がある。イデオロギー的モデルと経済的ショー・ウィンドウこそ固守しなければならない。

第二に、南大西洋沿岸の大半を占めるブラジルの戦略的意義の増大があげられる。アンゴラが社会的政治的反帝勢力の手中に帰するまで南大西洋は西側の完全な支配圏と見なされ、米国は戦略的危険性を感じたことがなかったため、軍事基地はほとんど皆無だった。ところがいまや同地域では軍拡が進められ、米国は、アンゴラ喪失の穴埋めのために同沿岸における軍事基地建設権をブラジル政府に要求している。これら

の理由から、「ブラジルの奇跡」と呼ばれるものの研究が死活的に重要なわけである。

これまでに見たとおり本論文は、帝国主義の現段階において従属諸国の経済発展がどこまで可能であり、またどのような形態をとりがちなのかを理論的に探ろうとするものである。そしてこのことは同時に、広大な国土と膨大な人口を擁し極要な地理的位置を占める国の国際的重要性についても触れることを意味するから、戦略的地政学的観点に言及することでもある。

## 一 「経済的奇跡」の歴史的位置づけ

ブラジルの「経済的奇跡」と呼ばれてきたものは、基本的には、国民総生産が一九六八―七三年に年間一〇パーセント近く拡大した持続的成長期と定義できる。この時期には工業生産と工業製品輸出、同国むけ国際信用と外貨準備がおおいに増大した。直接投資計画の多くは大規模なものとなり、南アメリカ大陸の隣邦やラテンアメリカの他地域にたいする行動は、国際舞台へのミドル・パワーの登場を告げるかに見えた。ブラジル政府の経済解決策が発展の処方箋に転化したのである。

この「奇跡」の先駆はなにであろうか。ここでは分析を省略するが、ブラジルでは前世紀の終わりから成長と停滞をくり返しつつ、かなりの工業基盤が築かれはじめる。<sup>(1)</sup>「奇跡」と見なされている現サイクルにもっとも近い先駆は、大体クビテック Juscelino Kubitschek [一九五六〜六一一年] 政権期に重なり合う一九五四〜六一一年のものである。この期間に国内総生産は年間七パーセント近い実質成長率をあげ(ただし・九パーセントに落ちた一九五六年を除く)、一九四八〜五二年の平均五パーセントをうわ回った。この期間(一九五四〜六一一年)ブラジルでは高度に(九九パーセント近く)統合された自動車産業が確立し、一九四〇年代にヴァルガス Getúlio Vargas [一九三〇〜四五、一九五一〜五四年] によって着手された鉄鋼生産、それにエネルギー供給(電力と、ペトロブラス PETROBRAS の開業)と自動車道路建設が拡大され、エレクトロニクス産業と機器産業が誕生した。

この経済ブームの主な道具立ては、財政的裏付けを欠く多額の国家投資が生んだ国内インフレと、一九五五年までの年間一〇〇〇ないし二〇〇〇万ドル程度から一九五六年には九〇〇〇万、一九五七年には一億四四〇〇万ドルに増大し、一九六一年まで年間一億ドル近くを維持した直接外国投資とで

ある。

この型の成長の結果はすぐに現われ、一九六二年には、一九六七年まで長引くことになる経済不況が始まる。国内インフレと対外為替危機がそのもっとも明白な証左だった。市場と投資をすぐには拡大しえないということこそ、基本的な問題だったのである。根本的な経済改革を抜きにしては資本の蓄積過程を継続しえないことがしだいに広く認められるようになった。しかしその状況をどう評価するかとなると、決して一様ではなかった。

興隆する民衆運動の圧力のもとにあって支配階級のあるセクターは、国内市場の拡大と対外市場の多角化によって危機を打開しようとした。この視点から出てくる政策は、農業所得改善のための農地改革、低所得労働者に有利な所得配分、民族資本支援と外資制限、基礎経済部門への国家投資の強化、最後にラテンアメリカ、アフリカおよび社会主義諸国の市場開拓のため独自の対外政策を展開することだったといえよう。

このような経済計画は、政治面では都市・農村の労働者およびブチ・ブルジョアジーに支援され大衆の広範な参加を見るデモクラシーのなかで展開される必要がある。この計画をひきいたのは、ヴァルガスが創設した組合組織によって支援

された進歩的政治家であるとともに大地主でもあったグラール João Goulart [一九六一―一九六四年]だった。

この政策に内包され、したがってそれを挫折に導いた矛盾は明らかである。賃労働者の所得上昇による国内市場の拡大は、新たな蓄積段階のための投資拡大を可能にするだけの平均利潤率の維持や利潤の集中と矛盾しており、それだけ民族資本の強化を妨げた。したがって民族資本を反対の立場に追いやったわけである。またこの民族主義的發展方式に含まれる外国資本の排除もしくは制限は、もうひとつの強大な敵をつくってしまった。単に国際的な敵ではない。というのは国際資本がすでに国内産業資本の強力なセクターをなしていたからである。したがって労働者と進歩的ブチ・ブルジョアジーだけがこの選択肢の社会的支持基盤としてとどまり、強力な国家介入と根底的な農地改革、それに真の社会的デモクラシーへとその目標を急進化させがちだった。しかもこのラジカリズムは、キューバ革命に鼓舞されて社会主義色をおびるにいたったのである。この事実は、なぜグラールが、その階級的出自をしないで克服しはじめたひとつの歴史過程から後退し、国際資本と結びついた国内ブルジョアジーの多数派が権力を握って絶対的覇権を確立する一九六四年の軍事クー

デターを黙認したのかを説明するものである。その覇権は、社会的急進化に驚いたブチ・ブルジョアジー勢力から支持を引きだしたとき確固たるものになりえた。「経済的奇跡」はこうした歴史過程の所産だった。したがってわれわれは、一九六四年の軍事クーデターの歴史的文脈のなかでこそそれを分析しなければならないのである。

### 三 「経済的奇跡」の計画

一九六四年の軍事クーデターは、単なる「クーデター」ではない。そのイデオロギーは、的確にもこれを「予防的革命的な政治的経済的冒険」にたいする内外の大資本の回答を示す明確な統治計画をたずさえて権力に到達したのである。

この計画もまた市場および投資面の経済危機の認識から生まれたものではあったが、正反対の方法によってそれを打開しようとした。

改革による国内市場の拡大が政治的に困難と判断した彼らは、高度なテクノロジーの産物を購入でき大都市に住む寡頭層に所得を集めることによって国内市場を拡大しなければならなかった。そのようなテクノロジーこそ、その市場浸透力

と高利潤の点でとりわけ巨大国際資本の関心をひいたものである。また労働力のかなりの部分をなす未熟練もしくは半熟練労働者の賃金のめだつた悪化は平均利潤率を引きあげ、資本を集中させた。

他方米国に全面的に追従し外資が果たす基本的役割を公然と受け入れるという政策は、「排外的ナショナルリズム」の障害を設けずにテクノロジヤやノウ・ハウとともに大量の外資を誘致せしめることになる。それと引きかえに企業側は、ブラジルの輸出のために支配下の工業製品市場を開放してその対外市場の拡大を助けることになる。

しかしながら上記の目標を達成するには、「高価な社会的代償」を伴う一時期を通過する必要がある。つまり国際通貨基金（IMF）が要求する「経済安定化」プログラムを基本的に採用し、前の時期から受けついでインフレ、なかでも賃金の物価スライド制や国際収支危機、*為替不均衡*に終止符を打ち、生産機構から生産性の低い中小企業を切りすて、ポプリスモが蔓延させたクリエンテリスモ的政策の遺物たる国家機構の非効率性を一掃する必要があった。ラティフォンディスタは、大土地所有が温存されるかわりに、その経済行動様式をあらため、近代化し、土地の生産性を上昇させるよう

に求められた。

この経済政策の政治的帰結は明白だった。この政策によって影響をこうむるブルジョアジーのあるセクターの突きあげを、そしてとくに「社会的代償」の必要性を「理解」しようとしぬい民衆勢力の圧力をものともしない強大かつ権威主義的でもしか近代的で能率的な国家が必要だった。消費制限とインフレ抑制政策の数年がすぎると経済成長期が始まり、そのときこそ体制のための政治的支持基盤を探しだせるはずだった。

こうした冷徹な社会経済的政治的計算には一見確固とした根拠があったかに見える。この根拠が中期的には当てはまらないことを立証しようとしたブルジョア自由主義的な、また民主的・民族主義的な反対派とはちがって、ブラジルの資本主義的発展と根本的に対決するわれわれとしては、ブラジルが資本主義の道を歩むかぎりそれが危機からの唯一の脱出口だったことを立証したい。またそれは世界的規模で進行する資本蓄積の新段階に対応するために必要な国際的プロジェクトの展望を大資本に与えるものであったこと、ブラジルの軍部が提起した従属的で独占的な経済構造と反民衆的で権威主義的な政治形態をもたらす道しか資本主義にとって発展の

ための選択肢がのこっていなかったことを立証したい。この選択肢にたいしてはすでに可能性が失われていた自立的で民族主義的な資本主義的發展ではなく、社会主義的發展を對置するしかなかった。そのためには、かつてグラールのポプリスモの傘下に結集するという誤りをおかした民衆勢力を魅きつける必要があった。<sup>(2)</sup>

したがって明らかなことだが、新しい蓄積段階の矛盾は、この持続的成長期の終わりに国内市場と国際収支の深刻な危機が相まってインフレを再燃させたときに露呈する。そのときになって、採用されてきた「打開策」が資本主義的發展の基本的問題を、すなわち、国民大衆を国内市場に吸収しえないうえにその本来的な脆弱性ゆえにすべての利益を国際資本によつてもち去られるという問題を回避したにすぎないことが、誰の目にもはっきりするのである。ブラジルの労働者が生活条件の改善や国民的尊厳、政治的自由を切望しても、自律的民族主義的資本主義のもとでは不可能であろう。ましてや、労働者にたいする基本的約束すら果たされることのない従属的經濟發展からは得られないだろう。「賃金を引きあげ、分割しえないほどわずかな国民所得の分けまえを増やすことに固執してはならない。パイ自体を大きくしてから配分すべ

「第三世界と世界政治」研究会・資料紹介(3)

きである」。歴史上いくどもなく使われたこの議論は、過去一二年間ブラジルの貧しい公生活を牛耳ってきた軍部および政府民間のテクノクラートとブルジョア政治家の唯一の思想的武器だった。

したがってわれわれは、上記の計画から生まれた「經濟的奇跡」がなんだったのか、そしてまったく健康そうに見える動物の内臓をむしばむ毒のようにそれに内包されていた危機について検討を加えよう。

#### 四 “奇跡”の時期

すでにのべたとおり、一九六四〜六七年にブラジルは不況に苦しんでいた。一九六三年に一・五パーセントしか伸びなかった国民生産は、一九六四年(二パーセント)、一九六五年(二・七パーセント)、一九六六年(五・一パーセント)、一九六七年(四・八パーセント)と低成長をつづけた。したがって一九六二〜六七年の平均成長率は、二・四パーセントの年間人口増加にたいして三・七パーセントだった。つまり一・三パーセントの一人当たり年間成長率を記録したにすぎない。これに比較し一九五六〜六二年には国内総生産の成長率が年間七・八パーセント、一人当たり実質成長率は四パー

(五九九) 一三九

セントだったのである。この期間に工業が年間一〇・三パーセント、農業が五・七パーセントの割合で成長したが、一九六二〜六七年にはそれぞれ三・九パーセントと四・〇パーセントの成長でしかなかった。

IMFの安定化政策が採用されるさいにこうした代償が受け入れられたことは明らかである。最低賃金の購買力は五五パーセント近くも激減した<sup>(3)</sup>。ブラジル計画省自身の研究によれば、産業労働者一人当たりの生産性が一九五五年を一〇〇としたばあい一九六三〜六六年に一七〇から一七八に上昇したのに、彼らの賃金は一三一から一一九に下落した<sup>(4)</sup>。

国民所得の配分は最高所得層五パーセントに極端に集中していた。一九六〇年と一九七〇年の人口センサスによれば、最高所得層五パーセントが一九六〇年には所得総額の二七・四パーセント、一九七〇年には三六・三パーセントを占めたことがわかる。このことは、国民平均三〇〇ドルから四〇〇ドルに上昇した一人当たり年間所得では、この五パーセントの層が一九六〇年には一六四五ドル、一九七〇年には二九四〇ドルを得たことを意味する。つまりブラジル人のうち五〇〇万人はヨーロッパ水準の一人当たり所得をえて暮らしていたわけである。しかしこれはまた、次の一五パーセントの層

が所得総額に占める二七パーセントの割合(一人当たり所得額は一九六〇年に五四〇ドル、一九七〇年に七二〇ドル)を維持したのにたいし、その次の四〇パーセントの層の割合が三四・三パーセントから二七・八パーセント(所得額では二五七ドルから二七八ドルへ)に落ちたことを意味する。そして最下層の所得層四〇パーセントが所得総額に占める割合は一・二パーセントから九パーセント(所得額では一九六〇年の八四ドルから一九七〇年の九〇ドルへ)に減少した。大富豪の所得額を過小評価しがちな人口センサスによってさえ、人口の八〇パーセントは生存維持のための最低水準にも達せず、国民所得総額に占めるそれまでも低かった割合は四五・五パーセントから三六・八パーセントへと一層悪化したのである。

社会的代償は明白だったが、財政面への影響もまたあきらかだった。一九六三年に八二パーセント、一九六四年には九三・三パーセントに達したインフレは一九六七年には年間二二・五パーセントに落ち、一九六三年には国民総生産の約四・八パーセントを占めた財政赤字は成長の最盛期である一九七一年には〇・三パーセントにまで減少した。国際収支赤字は、消費と投資の低調が招いた輸入減退によって減少した。



国家は、内外資本家の消費と投資の削減をうめ合わせるべく重要な消費者兼投資家となった。想像に反して外国資本は、一九六四〜六七年には同国にさほど流入しなかった。グラール期の一九六二年と一九六三年にそれぞれ九〇〇万ドルと三〇〇〇万ドルに減少した民間直接投資は一九六四年にも減りつづけ(二八〇〇万)、そして一九六五(七〇〇〇万)、一九六六年(七四〇〇万)、一九六七年(七六〇〇万)、一九六八年(六一〇〇万)といくぶん回復した。説明は簡単につく。つまり不況のばあいには投資は行なわれないのである。この時期に流入した資本と再投資分は、IMFが課した通貨安定化の柱のひとつである信用規制政策によって破産した民族系企業の買収にあてられたものである。

こうして、「ブラジルの奇跡」と呼びふるされる経済ブームが始まる一九六八年に到着する。なぜわれわれは、この重要な時期に到るのにこれほど時間をかけたのだろうか。理由は明らかである。つまり、この現象をわれわれのやり方で扱いそれに正しい評価を与えようとするからだ。多くの人々は、安全保障と発展を直接関連づけてブラジルの経済成長を軍事独裁に結びつけようとした。しかし第一に、重要な経済発展のピークは、当稿では分析しないが、クビチェック期ほかの

広範な民主主義的情況のもとで達成されていたのである。第二に、軍事独裁は戦後ブラジル史におけるもっとも深刻な経済不況(一九六二〜六七年)の元凶である。

ここで一九六八年から一九七四年までのブームがなから成っていたのかを見てみよう。この期間に国民総生産は約一〇パーセントの年間平均成長率で持続的に拡大した。なかでも工業生産は年間一パーセント近く成長した。同時に物価上昇も落ちつき、一九七二年に一七・五パーセントに低下し、一九七三年には、議論の余地があるデータではあるが、一パーセントにまで低下したのである。

これは奇跡のように見えた。いく年も高い物価上昇率を記録してきたブラジルが、インフレを抑えこみつつ高い成長率を残せるとは!

新局面の別の指標もまた、驚嘆と賛辞を生むに大きくあずかっていた。工業、なかでも高度なテクノロジを要する部門が成長した事実である。これは、技術的従属からの来たるべき解放を告げるものと信じられた。

被服履物業などがほとんど成長せず(一九六九〜七二年に一パーセント)、織物生産が四パーセント落ちこみ、製造業全体の五六パーセントの成長にもかかわらず建設業は二六パ

ーセントしか成長せず、機械生産もまた平均以下(四二パーセント)しか伸びなかったなどの事実は隠蔽された。ブラジル国民(ただしその二〇パーセント)は一九六四〜七二年に一四四パーセント増の輸送機器、一一三パーセント増の電気機器、六二パーセント増の非金属鉱石、六六パーセント増の金属製品、八九パーセント増のゴム製品、六九パーセント増の化学製品、それに五八パーセント増の紙およびカートン紙を消費するようになった。このような産業構造は容易に理解できる。つまり、所得を大きく増した人口の二〇パーセントの層の奢侈的消費に応じるべくなされた投資によって創出された需要に対応するものである。この時期の工業ブーム、とりわけ後方関連部門(自動車部品・鉄鋼・ガラスなど)と前方関連部門(自動車道路・建設業・商業センターなど)にたいする大きな波及効果をもつ自動車産業(まあ、この大衆消費資本主義時代の祭神、オートモデルよ)拡大のための投資や、巨額の新規投資を前提とする石油化学工業に負っている。また電力および石油インフラストラクチュア、製鉄、鉄鋼石採掘、セメント製造、自動車道路建設、そのほか工業インフラストラクチュア関係のあらゆる古典的支出がきわめて大きな成長率を示している。

一方、社会施策によって奇跡を補完しようとも試みられた。多額の住宅投資計画が公表され、この計画によって広範な国民の住宅問題解決の道が開かれるはずだった。しかしのちにその不徹底さと挫折とが明らかになった。また成年の文盲退治のための学生による民間教育運動としてMOBRALがつくられた。教育者として遠隔地に派遣された学生青年もいた。その成果について多額の費用をかけた大がかりな宣伝キャンペーンが行なわれたが、一九七四〜五年になつてMOBRAL指導部のスキャンダルが暴露され、宣伝の成果は水泡に帰し、教育の質そのものも疑われた。したがって次回の全国教育センサスは、MOBRALによって読み書き能力がどの程度向上したかの証拠を要求することだろう。

また近年、小・中・高・大学の学生が急増した。とくに多くの私立大学が新設され、ブラジルは教育ブームに突入したかのようだった。多くの大学院コースも設置され、「民族意識」の創出が声高く唱えられた。今日、きわめて低水準の私立校が幅をきかしているため教育の全般的な質は低下し、重大な危機が生まれている。これら私立大学によって授与された学位の認定を政府が拒否するほどに、事態は深刻なのである。教育ブームのもとで学業を終えた学生のための就職口が

不足していることも明らかであり、不満をいさぐく学士が増えつつある。

力を入れて宣伝された「奇跡」の別の側面は対外貿易である。ブラジルの輸出はこの期間にめざましく拡大した。一九六四年には一四億三〇〇〇万ドルだったのが、一九七五年には八二億ドルも輸出したのである。一年間に六倍近い急増なのだ！そのうえ輸出の内容が一変している。一九六五と六九年に同国の輸出の五三パーセントを占めていたコーヒーは、一九七一年までに二三・八パーセントに減少した。他の一次産品がこの期間に五〇・八パーセントから五七・一パーセントに増大した。鉄鋼輸出の比重は六・一パーセントから八・二パーセントに高まった。牛肉は一・九パーセントから五・二パーセントに上昇した。最後に工業製品輸出は、前述のとおり絶対量が急増したうえに、比率も七・三パーセントから一四・六パーセントに上昇した。

しかし、奇跡の宣伝者らが広めたデータは次の事実を看過していた。つまり輸出の成長が事実によ、輸入のほうがよりはるかに増大したこともまた真実である。一九六〇と六四年には輸入は年間一二億五〇〇〇万ドルで、一三億四〇〇〇万ドルの輸出を下回っていたが、一九七二年には四二億二四

〇〇万ドル、一九七五年には一二二億ドル（推定）に達した。これは、「奇跡」以前の貿易黒字が最終的には大幅な赤字に転落したことを意味する。一九七五年の貿易赤字は実に三五億ドルだったのだ！

ブラジルの経済的奇跡についてわれわれはあまりにも恣意的な紹介をしていないだろうか。そんなことはない。要するに、名高い奇跡は六年間の不況のあとの七年間の持続的経済成長にすぎない。周知の輸出増大はそれをう回る輸入増加と貿易収支の悪化をもたらしたわけであるし、目立った工業成長は特定部門に限られ、大衆消費むけ工業を衰退させることになる。また教育および住宅計画は、政府自身が認めるとおり、失敗に終わった。結局のところ、ブラジルの経済的奇跡のうち一体なにが残るといえるのか。またいかにしてあれほど知れわたり論議を呼びえたのだろうか。

われわれはまだ奇跡の危機に関する検討に入っていないが、その結論は簡単である。ここまでの考察は、奇跡のなかのプラスと見なされてきた点に関するものにすぎない。「奇跡」をめぐる大半の論議はその絶頂のときに行なわれ、その結果についていまだ明確な見通しがついていなかった。生産・輸出・外貨準備・学生数の増大、インフレの緩和、財政赤

字など解消不可能に見えた多くの障害の除去、以上のようなデータに圧倒されて多くの社会学者は守勢におちいり、この成長をひとつの事実と認めたらうでしかしそれがブラジルの国民の惨状を隠蔽していることを立証しようとした。彼らの批判する点はほんとうだった。栄養や衛生、生活条件に関するデータは、経済的奇跡が労働者の搾取率の上昇、労働時間の増大、彼らの食糧など基本的消費の悪化、とりわけ幼児死亡率の増加と表裏一体の関係にあったことを示している(たとえばABC——南半球最大の工業センターで、ブラジルの経済的奇跡の中核でもある大サンパウロに隣接する諸都市——における幼児死亡率は、一九六〇年の新生児一〇〇〇人当たり六九名から一九七二年には一〇一名に増えた)。したがって、人間労働の野蠻きわまりない超搾取にもとづくこの非合理的な経済成長が虚構の発展だったと立証したとしても、それはもっともなことである。

しかしながら、やがて山積した難問のなかでこの発展モデルを瓦解させる内的矛盾をあえて立証しようとする人は、ほとんどいなかった。今日ではこのモデルは危機のただ中にあたる。国民総生産の成長率は四パーセントに激減し、国際収支赤字と負債は財政破綻に近い数字を示し、有名だった外貨準

備は半減し、直接投資計画は撤回されはじめた。政府は輸入制限政策をとり、危機の重大さについて国民に警告せざるをえなくなつた。成長率が低下する一方、インフレは昂進し、一九七五年に二九・五パーセント、一九七六年には四〇パーセントへと急上昇した。奇跡が経済的崩壊へと一転したのである。一体なにが起きたのか。あれほど評判をとり宣伝もされた経済モデルがいまやこれほどの窮地におちいるとは、どう説明できるのか。国民総生産の拡大、財政の健全化、慢性的インフレの抑制、有望な輸出部門の確立、教育の向上、未来の大国といった美名のもとにブラジル国民に多大の犠牲を押しつけてきたすえにいまになって彼らに、その犠牲は(少なくとも短期的には)無益だったと言えようか。成長の鈍化と不況、財政不均衡とインフレ、入超と破産状態の対外部門、教育条件の悪化、そして疑わしい未来まで(それでもなお未来を信じなければいけない。とにかくこの災難から脱げなければならぬ。そうではないのか)を受けいれなければならない、と言わねばならないような事態をどう説明できるのか。

また、国際資本に国を明けわたしてしまったことをどう説明するのか。利用可能なデータを検討すると、一九五五年から一九六〇年までのクビチェック期の経済ブームのときと同

様に、この経済的奇跡によって多国籍企業がおおいにうるおったこと、また一九六二年から一九六七年までの不況によって倒産した民族系企業を買収したことがわかるだろう。

いまや、ブラジル経済のもっともダイナミックな部門は国際資本もしくは国営企業によって抑えられている。民族系企業は将来性のない分野に限られている。民族系経済グループは、工業・商業・金融および農業部門全般にわたる圧倒的な非民族化過程を生き抜くために再結集し、団結し、資本をまとめてようとしている。その結果、きわめて集中的で独占的な経済構造が形成された。これは一九六八―七一年にそれだけでなく、もとほしい貯蓄を投機に誘導する資本市場助成策によって促進されたのだが、この政策も最後には金融「崩壊」のうちに終わり、大資本と投機業者のみをうるおしたのだった。資源開発、特定地域への投資、観光開発などのための税制優遇政策は、とぼしい生産基盤に立つ金融市場を不相応に膨張させる無定見なクリオージョ・ケインズ主義を形成してしまった。

その結末は、一九七二年度の各経済部門における一〇大企業の資産保有を知るためにベイヤ― Werner Baer が利用した『*Visão*』誌のデータから知ることができ(9)。もっともダイナミックな部門における多国籍企業の支配は明白で

ある。これらのデータのいくつかを次に引用しよう。

多国籍企業は下記の経済部門の資本の大半をにぎっている。  
△タバコ▽外国系企業一社が同部門における一〇大企業の資本の九三・七パーセントを占める。

△輸送資材▽多国籍企業八社が八九・七パーセントを占める。

△ゴム製品▽多国籍企業三社が八一パーセントを占める。

△機械▽同じく七社が七二パーセントを占める。

△電気機器および通信資材▽多国籍企業七社が六一・三パーセントを占める。

△食料品▽多国籍企業六社が五八・九パーセントを占める。

△紡績▽多国籍企業五社が五五・四パーセントを占める。

△非金属鉱石▽多国籍企業五社が五二・四パーセントを占める。

公営企業は、鉱業(一社、五九・三パーセント)、鉄鋼・冶金(四社、七〇・三パーセント)、公益事業(九社、八六・九パーセント)、石油精製・配給(二社、八〇パーセント)のよう、基礎部門においてかなりの資産を保有している。

これと同じサンプルをとった政府のデータが示すところで

は、多国籍企業は主要鉱工業企業の純資産の四〇・四パーセント、生産の五五・二七パーセントをおさえている。政府企業の比率はそれぞれ三五・三九パーセントと二〇・七二パーセントである。したがって残る民族系企業の比率は二四・二二パーセントと二四・〇一パーセントである。

利潤獲得や販売市場においても国際資本が優越している事実をデータが示していることも、銘記しておく必要がある。

要するに、終わりにさしかかった奇跡の主たる受益層は最高所得をえる国民の五パーセントの層と多国籍企業である。国家機構もまた強化されたが、巨大国際資本に奉仕している。たとえ経済的奇跡がつづいていたにせよ、事態は深刻化こそすれ、決して好転しえないであろう。

## 五 “経済的奇跡”の危機

ここでブラジルの奇跡の危機についていくつかの最終的な考察を行なうことができる。すでにその中心的な要素の分析は終わったからである。ではその危機の広がりと深刻さほどの程度なのか。それはどう説明がつくのか。いつまで危機は続くのだろうか。この危機の結果としてブラジル自身、そして現体制にはいかなる前途があるのだろうか。

一九七四年に危機の最初の兆候が現われた。電子機器のよいうな主軸製品の消費が減退しはじめた。操業率はあまり低下しなかったが、在庫が増えていった。政府は販売促進のために信用を拡大したが、その結果インフレが再燃した。

対外面では貿易および貿易外収支の赤字が激増し、借款と投資を弁済しえなくなった。そのため、蓄えられてきた外貨準備に大幅に手をつける必要に迫られた。

一九七五年にはこうした事実がさらにすさまじさを増した。国民生産の成長率は四パーセントに落ち、インフレ率は二〇・五パーセントに上昇し、生活費は三一・二パーセントも増大した。

対外部門における事態好転の期待もかなえられなかった。一九七五年のデータを見ても、それは一九七四年のデータのくり返しにすぎない。

つまり八七億ドルの輸出にたいして輸入は一二二億ドルだった。入超は三五億ドルにのぼった。

貿易外収支は、外債の利払いの増加と巨額の利潤送還を反映して、三二億ドルの赤字をだした。

その結果一九七四年と同様に、經常勘定収支は六七億ドルもの赤字だった。国際借款、援助および外資流入が約五二億

ドルだったので、結局、国際収支の赤字は一五億ドルとなり、外貨準備から穴埋めされた。

したがって外貨準備は三八億ドルにまで落ちこんだ。これは二年前の六四億一七〇〇万ドルのほぼ半分にすぎなかった。他方、対外債務は二二〇億ドルに増大した。ブラジル政府のテクノクラートは外債総額を無意味なデータと見なしていた。このデータから準備高を差し引いて対外純債務を導きだすことが必要だと考えていたのである。

しかし結果は、それら抜け目ない財政家の思惑とは反対だった。準備金の作爲的な引きあげによって純債務と輸出総額との比率は、一九六九年の一・六二から一九七三年には〇・九九に減少した。これはいわゆる奇跡の成果のひとつだった。しかし、準備金があればほど激減しているときにはどうなるのか。

その比率は二年間で一・九三に増大した。すなわち純外債（債務総額から準備金を差しひいたもの）は輸出総額のほぼ二倍だった。これこそ奇跡の結末なのだ。債務／輸出係数は減少するどころか増大した。

奇跡を演出した政治家らが巧妙に操作したデータを並べて読者を飽かせるつもりはないが、データは、純債務が準備金

に等しいという一九七三年のブラジルの類いまれな財政情況を示していた。しかし傑作なことに、純債務というのは、作爲的につくりだされた準備金を債務総額から差し引いたものだった。このように、より多くの借金をえるためにきわめて巧妙にデータがもてあそばされたのだった。勘定は簡単である。一九七三年にブラジルの対外債務は二年前の倍になった（一九七二年に六四億二四〇〇万ドルだったが、一九七三年には一二五億七一〇〇万ドルに増えた）。しかし、あなた方での悪い経済専門家たちよ、驚きのあまり失神したまえ。ブラジルの財政状態は……なんと好転した、とされているのである。一体なぜなのか。簡単なことである。一九七一年にブラジルには一七億一三〇〇万ドルの準備金しかなかった。したがってその純債務は四八億九八〇〇万ドルだった。一九七三年にブラジルは、金融上の魔術をくり出すことによって六四億一七〇〇万ドルの準備金をもつにいたり、したがってその純債務は六一億五五〇〇万ドルにすぎなくなった。つまり、外貨準備金に等しい純債務をかかえるにすぎないわけである。

こうしてブラジルは、低開発世界において財政的にもっとも安定した国となった。

ナチス・ドイツのシャハト Hjalmar Schacht の時代以来、これほど大胆不敵な財政上の手品はほとんど見たことがない。私には一二〇億ドルの借財があるが六〇億ドルをもって、したがって事実上六〇億ドルの借金だけだ。ところで事実上六〇億ドルの借金で、六〇億ドルをもっているのなら、私はまったく返済可能なのだ、と！

事實はなんと苛酷な経済的教訓を与えていることだろう。

債務をうわ回る新規借款の補給がとだえると、この魔術は消えうせる。しかも事實は扉を乱打している。国際収支の現在の傾向が続くなら、ブラジルは有名な準備金を二年先には使いはたし、二八〇億ドルもの債務総額（そして純債務）をかかえむことであろう……。破産的情况なのだ……。

なにをなすべきか。より多くの借款を獲得するというのか。ブラジルに友好的な金融機関（IMF、米国の輸出入銀行、民間銀行）は、返済不能が明白な三〇億ドル以上も毎年ひき渡しえようか。破産に等しい国に毎年二〇億ドル以上も投資されるだろうか。データは短期直接投資が激減したことを示している。有名なホット・マネーは急速に資金を回収して撤退する。したがって事態はきわめて深刻なのである。

もっとも輸出は増大するかもしれない。この見通しは、国

際経済回復の効果が世界市場にあらわれ始める一九七六年末までには出てくる。しかしこれは、輸入を減らしうるばあいへのみ好結果をもたらすわけだし、だいたい工業製品の輸出と輸入とのあいだには密接な関連がある。輸出増大に必要な投資をブラジルに定着させるのは、多国籍企業によって輸入される機械と原料である。貿易収支のデータは、輸出の増大がそれ<sup>※</sup>をうわ回る原料・機械輸入をもたらすことを立証済みである。

そのうえブラジルの鉱工業輸出の大半は（従属国一般においてそうであるように）多国籍企業によるものである。ドイツリンゲル Carlos Von Doellinger が集めたデータによれば、ブラジルの鉱工業輸出の五一・四パーセントを多国籍企業が占めている。政府企業は三八・八パーセントを、民族系民間企業にいたっては九・八パーセントを占めるにすぎない。

したがって輸出の増大は多国籍企業の利潤形成に大きく貢献していることが明らかであり、しかも利潤はすぐに国外送還され、資本収支の赤字は増大する。

政府はこの利潤の大量流出を規制できるだろうか。それは、“経済的奇跡”のカギと見なされる多国籍企業と対決することを意味しよう。



最後に、輸出入量の増大は一層多くの運賃・保険料の支払いをとまうことを考慮しなければならない。この分野は国際的の海運企業に牛耳られており、外貨の大量流出は避けられない。そのため運賃・保険料勘定はマイナス成長の累積となる。欧米および日本むけの輸送手段が国際的の巨大グループに独占されている今日、それにかわる民族系商船隊を創設する可能性がどの程度あるというのだろう。

それでは一体なにをなすべきなのか。

発展モデル全体の再検討の必要性を唱えはじめた「体制」側のセクターも少なくはない。一九七五年にとられた応急策は、政府企業の輸入削減、奢侈財の輸入制限、それに観光によるドル流出の阻止をめざした。しかしそれらは現象の外殻をひっかいたにすぎない。問題は多国籍企業と従属的経済発展構造全体なのである。

かわりに使おうとした政策そのものが矛盾している。つまり、購買力をもたない幾百万窮民からなる国内市場へ向けて生産を方向転換させようというのだから。一体どのようにして可能なのか。そのためには彼らを国の経済的政治的生活に参入させなければならないだろうし、これには根底的な社会変革が必要である。彼ら大多数の国民の抑圧者として誕生し、

しかも政治的にそう自己規定した体制に、それが可能だろうか。

どのような社会的支援をえて民族産業を保護し、国家を強化し、多国籍企業と対決するというのか。どのような国際的支援をえてなのか。五パーセントの最高所得層と多国籍企業、それに米国の対外政策とあれほど公然と結びついてきた体制に、それが可能だろうか。断じてそうではない。

したがってブラジルの経済再建計画は、現体制からは決して生まれえない。国際資本の前に屈服した民族資本からも、国民を裏切り搾取するために自らの創造力を使ったテクノクラートからも、国民が飢えているときに武力によって抑圧・検閲・拷問を加えた軍部からも生まれえない。

国民のためのブラジルの経済再建計画は、都市および農村の労働者、独裁によって抑圧されてきた知識人、そして強圧的な経済集中によってプロレタリア化の途上にある農民と都市の小所有者からのみ生まれえよう。ブラジル国民のみが彼らの祖国を救うだろう。それ以外の道は、しだいに大規模かつ一触即発の危機へと未来を押しやる応急策にすぎないのである。

(1) ブラジルの工業化に関するもっとも完璧な事実分析はベイヤ

一〇著作『Industrialization and Economic Development in Brazil』Homewood, R. D. Irwin, 1965) のなかで見られる。同著はポルトガル語で翻訳された『A Industrialização e o Desenvolvimento Econômico do Brasil』2a. ed. rev. y aumentada, 1975, Rio de Janeiro, Fundação Getúlio Vargas) の論文で使用する統計の主な典拠ともなる。

(二) この見解は、『経済的奇跡』のはるか以前の一九六六年に限定第一版が刊行された拙著において論括されている。同著は一九六九年に公開されたのち一九七一年に改訂・増補版がでた『Socialismo o Fascismo: El Nuevo Carácter de la Dependencia y El Dilema Latinoamericano』Chile, Ed. PLA, 1971; Argentina, Edición Periferia, 1973)°。メキシコでは一九七八年と Ed. Edicol から出版された予定がある。

(三) Raimundo Arroyo, *La Pauperización Relativa y Absoluta del Proletariado Brasileño en la Última Década. Manuscrito*, Escuela Nacional de Economía, UNAM, 1975 参照。  
 (四) Brasil, Ministério do Planejamento e Coordenação Geral, *A Industrialização Brasileira: Diagnóstico y Perspectivas*, Rio de Janeiro, 1969, p. 146.

(五) Werner Baer, *op. cit.*, p. 239.

(六) Mario Henrique Simonsen y Roberto de Oliveira Campos, *A Nova Economia Brasileira*, Rio, 1974, p. 80.

(七) これらのデータは保守系の『Estado de São Paulo』紙の一九七六年一月二五日号において発表されたものである。前出のフーロヨは一九六四年以後のブラジルにおける超搾取について詳

細に検討している。

(八) フルタード Celso Furtado の著作『El desarrollo económico: El Mito del Desarrollo, Siglo XXI, 1975)』をこのた論理展開に沿ったものとみる。

(九) Baer, *op. cit.*, p. 256. この部分は、『ユサン』誌のデータのなからブラジルの主要企業をサンプルとして抜きだしたものである。

(一〇) 一九七五年のデータは Departamento de Economía de la Federación y Centro de Industrias del Estado de São Paulo が作成した年次貸借対照表から抜きだしたものとあり、『エスタド・デ・サン・パウロ』紙の一九七六年一月二五日号からの引用である。

〔一九七八年版註〕

※ カーター政権になって状況は変わってきている。「人権」を支持して西ドイツとの核エネルギー協定に反対する米國政府からの圧力は、ブラジル政府による軍事援助条約の破棄をひきおこし、一九七八年初頭の現在、新しい政治的合意は、まだになされていない。

※ 一九七七年にはコーヒー価格が暴騰し、貿易収支と国際収支が一時的に好転した。

(Copyright by Theotonio Dos Santos, December 12, 1978)